

# 1 包除原理

数え上げのテクニックの一つ。集合  $A$  が与えられ、その要素を変数とする述語たち  $\mathcal{P} = \{P_1, \dots, P_k\}$  を考える。  $1 \leq i \leq k$  に対して  $A$  の部分集合  $A_i$  を  $A_i = \{a \in A \mid P_i(a)\}$  で定めるとき、  $\bigcup_{i=1}^k A_i$  の要素数を求めるものである。  $\Lambda_K = \{1, \dots, k\}$  とする。

$$\left| \bigcup_{i=1}^k A_i \right| = \sum_{\emptyset \subset \Lambda \subseteq \Lambda_K} (-1)^{|\Lambda|-1} \cdot \left| \bigcap_{i \in \Lambda} A_i \right|. \quad (1)$$

$$= \sum_{j=1}^k (-1)^{j-1} \cdot \left( \sum_{|\Lambda|=j} \left| \bigcap_{i \in \Lambda} A_i \right| \right). \quad (2)$$

$\Lambda$  の要素数を固定したときに  $\left| \bigcap_{i \in \Lambda} A_i \right|$  の総和を DP などでも求められるなら、式 (2) を用いて計算することができる。また、特に  $|\Lambda| = |\Lambda'| \Rightarrow \left| \bigcap_{i \in \Lambda} A_i \right| = \left| \bigcap_{i \in \Lambda'} A_i \right|$  であるなら、  $|\Lambda| = j$  であるような  $\Lambda$  の代表元を  $\Lambda^j$  と書くことにして次のように変形できる。

$$\left| \bigcup_{i=1}^k A_i \right| = \sum_{j=1}^k (-1)^{j-1} \cdot {}_k C_j \cdot \left| \bigcap_{i \in \Lambda^j} A_i \right|. \quad (3)$$

式 (1) においては  $\sum$  で足される項が  $2^k - 1$  個だったのに対し、式 (2)–(3) では  $k$  に減っていてうれしい。

上の議論は、  $\left| \bigcap_{i \in \Lambda} A_i \right|$  を計算するのが容易であることを前提としているが、逆に  $\left| \bigcap_{i \in \Lambda} (A \setminus A_i) \right|$  の計算が容易な状況<sup>\*1</sup>で  $\bigcap_{i=1}^k A_i$  の要素数を求めたいときには以下のようにするとよい。

$$\bigcap_{i=1}^k A_i = A \setminus \left( \bigcup_{i=1}^k (A \setminus A_i) \right).$$

すなわち、

$$\left| \bigcap_{i=1}^k A_i \right| = |A| - \left| \bigcup_{i=1}^k (A \setminus A_i) \right|. \quad (4)$$

これは、  $A \setminus A_i$  を  $A_i$  と置き直すことで、式 (1) の枠組みで求められる。

<sup>\*1</sup> 満たす条件を決め打ちするよりも、満たさない条件を決め打ちした方が楽な場合。

## 1.1 証明

$\Lambda$  の大きさ  $n$  に関する帰納法で示す．  $n = 2$  の場合は Venn 図などから示される（省略）．  $n < k$  で成り立っていることを仮定する． まず，  $n = 2$  の場合の式を用いて次のように変形する．

$$\begin{aligned} \left| \bigcup_{i=1}^k A_i \right| &= \left| \left( \bigcup_{i=1}^{k-1} A_i \right) \cup A_k \right| \\ &= \left| \bigcup_{i=1}^{k-1} A_i \right| + |A_k| - \left| \left( \bigcup_{i=1}^{k-1} A_i \right) \cap A_k \right| \\ &= \left| \bigcup_{i=1}^{k-1} A_i \right| + |A_k| - \left| \bigcup_{i=1}^{k-1} (A_i \cap A_k) \right| \end{aligned}$$

さらに，  $n = k - 1$  の場合の式を用いて右辺の各項は次のように変形できる．

$$\left| \bigcup_{i=1}^{k-1} A_i \right| = \sum_{\emptyset \subset \Lambda \subseteq \Lambda_{k-1}} (-1)^{|\Lambda|-1} \cdot \left| \bigcap_{i \in \Lambda} A_i \right|.$$

$$|A_k| = \sum_{\Lambda=\{k\}} (-1)^{1-1} \cdot \left| \bigcap_{i \in \Lambda} A_i \right|.$$

$$\begin{aligned} - \left| \bigcup_{i=1}^{k-1} (A_i \cap A_k) \right| &= - \sum_{\emptyset \subset \Lambda \subseteq \Lambda_{k-1}} (-1)^{|\Lambda|-1} \cdot \left| \bigcap_{i \in \Lambda} (A_i \cap A_k) \right| \\ &= - \sum_{\emptyset \subset \Lambda \subseteq \Lambda_{k-1}} (-1)^{|\Lambda|-1} \cdot \left| \left( \bigcap_{i \in \Lambda} A_i \right) \cap A_k \right| \\ &= \sum_{\emptyset \subset \Lambda \subseteq \Lambda_{k-1}} (-1)^{|\Lambda \cup \{k\}|-1} \cdot \left| \bigcap_{i \in \Lambda \cup \{k\}} A_i \right|. \end{aligned}$$

第 1 項は  $A_k$  を含まない  $k - 1$  個以下の積集合，第 2 項は  $A_k$  のみからなる集合，第 3 項は  $A_k$  を含む 2 個以上  $k$  個以下の積集合に関する式になっており，次のようにまとめることができる．

$$\left| \bigcup_{i=1}^k A_i \right| = \sum_{\emptyset \subset \Lambda \subseteq \Lambda_k} (-1)^{|\Lambda|-1} \cdot \left| \bigcap_{i \in \Lambda} A_i \right|.$$

## 1.2 発展

### 1.2.1 高速ゼータ変換・高速 Möbius 変換

高速ゼータ変換は，集合  $S$  の部分集合を指数に取る関数  $f$  に対して  $g(S) = \sum_{T \subseteq S} f(T)$  を  $O(|S| \cdot 2^{|S|})$  時間で求める．高速 Möbius 変換はその逆変換に相当し， $f(S) = \sum_{T \subseteq S} (-1)^{|S \setminus T|} \cdot g(T)$  を求める．

```
// fast zeta transformation
for (size_type i = 0; i < n; ++i)
    for (size_type j = 0; j < (1_zu << n); ++j)
        if (j >> i & 1_zu) dp[j] += dp[j ^ (1_zu << i)];
```

```
// fast Moebius transformation
for (size_type i = 0; i < n; ++i)
    for (size_type j = 0; j < (1_zu << n); ++j)
        if (j >> i & 1_zu) dp[j] -= dp[j ^ (1_zu << i)];
```

各  $j$  について  $dp[j] = f(j)$  で初期化し、ゼータ変換を施すと  $dp[j] = g(j)$  になっている。Möbius 変換についても  $g$  と  $f$  が逆になること以外は同様である。ここで、 $j$  は部分集合を 2 進数でエンコードしたものである。

たとえば、 $\Lambda_k$  の各部分集合  $S$  に対して  $\sum_{T \subseteq S} (-1)^{|T|} \cdot |\bigcap_{i \in T} A_i|$  を考える。これは、 $g(T) = |\bigcap_{i \in T} A_i|$  として高速 Möbius 変換で得られる  $f(S)$  を用いて  $(-1)^{|S|} \cdot f(S)$  として計算できる。

### 1.2.2 DP

式 (2) より、 $j$  個の条件を満たす場合の数を求めることを考える。

$dp[i][j]$  では、 $i$  番目までの条件を見て、そのうち  $j$  個の条件を満たす場合の数（を求めるための値<sup>\*2</sup>）として定義する。 $dp[i][j]$  から  $dp[i+1][j+1]$  への遷移（ $i$  番目の条件を満たす）と  $dp[i+1][j]$  への遷移（ $i$  番目の条件を考慮しない）をそれぞれがばって考える。その後、 $dp[N][j]$  から  $\sum_{|\Lambda|=j} |\bigcap_{i \in \Lambda} A_i|$  を求めることで式 (2) を計算できる。

## 1.3 補足

### 1.3.1 暗黙の制約

$n \leq 10^9$ 、 $n \leq 10^{18}$  なら  $n$  の持つ素因数の個数はそれぞれ、たかだか 9 個、15 個なので、 $n$  が多少大きくても  $n$  の素因数に関する部分集合であれば式 (1) をそのまま計算することができる。

---

<sup>\*2</sup> 遷移のしやすさと相談するとよさそう。